

優秀賞

## 『気流の鳴る音：交響するコミュニケーション』

真木悠介著、筑摩書房、2003.

神田 竜之介（経済学部 国際経済学科 3年）

今回は私の人生観に最も影響を与えた1冊を紹介します。その本は社会学者の真木悠介さんによる『気流の鳴る音：交響するコミュニケーション』です。本書の主題はメキシコ北部に住むヤキ族の知者ドン・ファンの教えをてがかりに、魅力的な生のありようを探求することです。本書が出版されたのは約40年前。日本は高度経済成長の真っ最中でした。人々の生活が物質的に豊かになる一方、政府や企業は経済合理性を最優先にする施策を実施し公害や環境の問題が発生していました。こうした中、真木は近代化によって人間が失ってしまった感性があることに気づきます。本書は失った感性をドン・ファンの言葉を素材に解き明かしています。ドン・ファンの生き方を象徴する言葉を引用してみましょう。

「わしにとっては、心のある道に行くことだけだ。どんな道にせよ、心のある道をな。そういう道をわしは旅する。その道のりのすべてを歩みつくすことだけが、ただひとつの価値のある証しなのだよ。その道を息もつかずに、目を見開いてわしは旅する。」

ドン・ファンにとって「心のある道」とは、自然とのかかわりの中で充実した生の道を静かに歩むことです。価値があるのは豊かな自然とみずみずしい身体感覚だけなのです。現代人はせき立てられているかのように行動して結果を出すことを求められているように思います。それは今ある生の空疎感を埋めるために、いまの行動の意味を未来に求めようとするからではないでしょうか。言い換えれば、無味乾燥とした「いま」を未来の理想をかなえる手段と捉えることにより現状を肯定しているとも言えます。けれどもドン・ファンが説くようにいまある生の感覚が満ち足りていれば、生活に意味を探する必要はありません。このように、本書はドン・ファンの教えを素材に近代人が失ってしまった生の感覚を思い起こさせてくれます。

次に研究者としての真木悠介の魅力を紹介します。真木悠介の詩的な文章を読むと、何か浮遊する感覚が得られると思います。それは私たちが持つ「当たり前」を内側から突き崩される感覚と言っても良いかもしれません。理由は上手く言語化できないのですが、おそらく真木が人間関係の総体としての社会のありようを理論的な水準を超えて、身体的な水準にまで理解していたからだと考えます。それには彼の独特な知的態度が関連しています。本書の中で真木は、真の「明晰」とは言語的に明晰になること（≒知識をつけること）なのではない。むしろ「言語」は世界をみる一つ的手段に過ぎず、別な見方もありうる、という姿勢こそが真の「明晰」であると説きます。こうした研究へのラディカルな知的態度が、彼の文章表現に表れているのだと思います。

私は「いかに生きるか」という問いに徹底的かつラディカルな視点から考え抜こうとする姿勢に触発され、真木悠介の学問の虜になりました。本書は彼の著作群の中でも最もおすすめできる一冊です。